
ブラザークエスト その3

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラザークエスト その3

【Nコード】

N2938M

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

生き別れた兄を探す弟の物語。

なぜ兄は消息を絶ったのか？

今どこで何をしているのか？

わずかな情報を元に、北条アキラはゆく。

作：青木弘樹

次の日。

俺は早速、北斗運送へ行ってみた。北斗運送に電話はしなかった。先に行くことを伝えると、向こうが会いたくないと思っていた場合、避けられるかもしれないからだ。

バスに揺られること30分。近くのバス停に着いた。

「さて、あと少しだな…」

10分ほど歩くと、看板が見えた。

「ここか…」

大きい会社だった。俺は守衛の人に話しかけた。

「すみません」

「なんででしょうか？」

「実は親戚がここで働いていると聞いて、それで急用があってきたんですが」

「そうですね。その方のお名前は？」

「北条ナオトといいます」

「わかりました。しばらくお待ちください」

「すみません」

守衛の人は、何やら無線で連絡をとっていた。

「ここではちょっと分からないので、奥に事務所がありますので、そこへ行つて下さい。えっと…その前に、この紙に名前を書いてください」

「分かりました」

俺は名前を書いた。

「はい。北条アキラさんですね」

「はい」

「分かりました。では、この札を持って行ってください。この札を首にかけてないと不審者だと思われるので、無くさないように気をつけてください」

「分かりました」

「帰るときに、また札をここへ持ってきてください」

「はい。分かりました」

俺は番号の書かれた札を受け取り、事務所へと向かった。

大きなトラックがたくさん停まってある。皆いそがしそうに働いていた。

事務所の前に着いた。鍵がかかっている。インターホンがあるので、押してみた。

”ピンポン”

「はい。どちらさまでしょうか」

「あの…親戚をたずねてきた北条アキラという者ですが」

「ああ…聞いてますよ。では番号札の番号を言って下さい」

「えっと…H・2331です」

「H・2331ね…少しお待ちください」

「…」

「確認できました。どうぞ」

”ガチャ”

鍵が開いた。俺はドアを開け、中に入った。事務員らしき女性が三人いた。

「北条アキラさんですね」

50歳くらいの女性が話しかけてきた。出来れば、その後ろで電話をしている20代前半らしき若い女性に話しかけてもらいたかったが、今はそんなことを考えている場合ではない。

「どうぞお座りください」

「あ、どうも。失礼します」

俺はソファーに座った。

「ちょっと待っててくださいね」

女性は何かを取りに行った。

「お茶をどうぞ」

奥にいたもうひとりの30歳くらいの女性がお茶を出してくれた。

「あ、どうもすみません」

「失礼します」

長い髪がふわりと揺れた。俺は思わずそのうしろ姿に見とれてしまった。

「はいはい、お待たせしました」

間もなくして50歳くらいの女性が戻ってきた。俺は気を引き締めた。

「じゃあ、調べてみるわね。北条さん…北条さん…」

それは従業員名簿のようなものだった。

「…」

こちらからは見えづらいが、俺は軽く覗き込んでいた。

「あら…？北条ナオトなんて人は、いないわ」

「！？」

「北条さん…ほんとにその人はここの従業員なの？」

「ええ、そう聞いて来たんですけど…」

「けど…」

女性は名簿を見せてくれた。は行の所を見てみたが、北条ナオトなどいなかった。

「そんな…」

「ちょっと待って。コンピュータで調べてみるから。横山さん、いま大丈夫？」

「はい」

横山さんとは、さっきの30歳くらいの長い髪の女性だった。

「悪いんだけど、ちょっとコンピュータで調べてくれないかしら？」

北条ナオトって名前の人がこの会社で働いているかどうかを「

「分かりました」

俺はしばらく待った。

「やっぱりいません。過去のデータも見てみましたが、いませんでした」

「そう。ありがとう」

横山さんという人は自分の仕事に戻った。

「北条さん、会社を間違えたんじゃないかしら？」

「いえ、会社は間違いなくここです」

「そう…。けど、とにかく北条ナオトなんて人は、むかしも今もこの会社にいないみたいだわ」

「そんな…」

俺はわけがわからなかった。なぜケンジさんは嘘を？それとも会社名を間違えたのか？

どちらにしても、ここにいてもしかたがない。俺は帰ることにした。

夜。俺はケンジさんに連絡してみた。

しかし電話をしても出ない。メールを送っても返事がない。

「どうしたんだろう。いそがしいのかな…」

そして次の日の昼ごろ。ケンジさんから電話がかかってきた。

「もしもし」

「やあ。アキラ君。連絡くれていたんだね。すまないね。ちょっといそがしくてね」

「いえ。あ、あの実は…」

「アキラ君」

「はい？」

「今日の夜11時。はぎわら歯科の近くのコンビニに来てくれないか？」

「え？」

「待っているよ」

「あ、あの…！」

電話は切れた。

「なんなんだ…いったい…?」

突然の電話。一方的な伝言。いったいなんなのか?

しかし俺は行くことにした。妙な不安はあったが、とにかく行くことにした。

そして夜11時。

俺は言われたとおり、コンビニに来ていた。しかし、
「ん?」

真っ暗だ。今時24時間営業じゃないコンビニはない。見ると入り口に張り紙がしてあった。

” 月×日をもって、閉店させていただきます。ご愛用ありがとうございます”

なんとその店は昨日で閉店していた。

「どういうことだ…」

俺は真っ暗なコンビニの前の、真っ暗な駐車場でたたずんでいた。

「こんな所に呼び出して…なんなんだ…?」

そして、その時、

「待たせたね」

ケンジが現れた。

「ケンジさん…!」

暗くてよく分からなかったが、ケンジは首に包帯はしていたが、左手首にはしていなかった。

「なんなんですか?こんな所に呼び出して」

「すまない。静かな所で話したかったもんでね」

確かにこのあたりは大通りから離れている。人気はない。

「ケンジさん、北斗運送に北条ナオトという人物はいませんでしたよ。どういことですか?」

「…」

「ケンジさん?」

「ふふふ…」

「…?」

「ははははは！」

「!?!」

「そうだよ。いないよ。いるわけないんだ」

「な、なんですか!?!」

「全部嘘だからだ、アキラ君」

「!?!」

俺はわけがわからなかった。

「全部嘘なんだよ。私は市川ケンジなどではない。そもそも母に弟などいなかったからな」

「!?!」

「いい物を見せてやるう」

男はそう言うと、首に巻いてあった包帯をゆっくり外しだした。

「ま、まさか…」

そして包帯はすべて取られた。さらに

”ベリベリ…”

なんと髭がはがれた。あの髭は付け髭だったのだ。

「!?!」

そして男は首筋をこちらに向け、持っていたライターで、自分の首筋を照らした。

「さあ、よく見るがいい！」

男は、はっきりと言った。

「…!」

俺は驚愕した。そこにはほくろが二つあった！

「まさか…!」

「そうだよ、その通りだよ。俺はお前の兄の北条ナオトだ！」

「!?!」

「久しぶりだな、アキラ」

「に、兄さん…!」

「その目の下のほくろ、よく覚えているよ。赤ん坊のお前はかわいかったからなあ」

「…」

「どうした？ やつと会えたんだぞ。お前には目的があったろう、ん？ 俺に何か聞いたかったんじゃないのか？」

「それは…」

「答えてやるよ。お前は弟だからな。今や、たった一人の肉親だ」

「兄さん…あなたは…母を…母を殺したのか？」

「ああ、そうだ」

「…！」

あつさり答えたので、俺は驚いたと同時に、少しパニックになった。

「な…どうして!？」

「おふくろだけじゃない、おやじも…俺が殺してやった」

「なに!？」

「酔っ払ったあいつを突き落としたのさ」

「そ…」

俺は言葉がうまく出なかった。

「当然だろ？ なんせ俺は親に捨てられたんだからな。いや違う…俺は…」

「…」

「俺は親に売られたんだよ！」

「!?!…う、売られた？」

「何も聞いてないみたいだなアキラ。20年前のことを…」

「20年前…」

ナオトは話し始めた。

「20年前…当時、うちは貧乏で、生活は苦しかった。おやじは仕事はまじめにしていたようだが、とにかく酒が好きで、他は切り詰めても酒だけはいつも飲んでた。おふくろも働いていたが、おふくろは体がそんなに強くなかったので、稼ぎは少なかった」

「そのあたりのことは…なんとなく知っている…」

「…そんなある日。ある老夫婦が家を訪ねてきた。おやじの友人の知人だったらしいが、二人には子供がおらず、養子になってくれる子供を探していたそうだ」

「…」

「そしてその老夫婦はかなりの資産家で、養子になってくれる子供を見つけてくれたら、かなりのお礼をくれると言ってきたらしい」

「…」

「そして…俺は養子に出された。おやじはかなりの謝礼を受け取ったらしいよ」

「そんな…」

「しかし俺は養子縁組の手続きはしなかった。いつか本当の親の元へ帰りたかったからだ。しかし…それから4年後、老夫婦は突然、交通事故で亡くなってしまった。そしてその途端、老夫婦の親戚だの家族だのいうやつらが次々現れ、俺は追い出されてしまった」

「…」

「遠い町でひとりきり…俺は必死で生きたよ。そして一年後、ようやく見つけた父を…俺は殺してやった」

「…」

「父を殺して気が済んだ俺は、しばらくまじめに働いた。しかし…3年前、母を偶然見かけたんだ。俺は母に話しかけたよ。当然、母は驚いていた。そして謝った。しかしその後のセリフが、俺を逆上させた」

『お金のことで困ったら、いつでも言ってきておくれ』

「俺はそんなことのために話しかけたんじゃない！ただ抱きしめてほしかった。それをあいつは…。だから俺は決意した。こいつも殺してしまおうと」

「に、兄さん…」

「これが俺の人生のすべてだ。どうだアキラ？俺を殺したいか？」

「兄さん…俺は…」

「しかし…今となつてはもう金も、親も、仕事も…どうだっていい」
「兄さん…」

俺は言葉が出なかった。

「しょせん人生など…」

その瞬間、ナオトは拳銃を取り出し撃つた！

”パンツ！”

「うっ！」

弾は俺の左肩のあたりをかすり、皮膚を切り裂いた。

「…」

そしてナオトは逃げ去った。

「兄さん！つつ…！」

俺は追いかけた。

「くそっ！銃なんて…いったいどこで…！？」

俺は痛みを我慢しつつ、あたりを探しまわった。

「いない…」

俺はその場に座り込んだ。血が左腕をしたたる。もろに当たって
いないとはいえ、皮膚をえぐられたようなこの傷。拳銃とは、凄ま
じい威力だ。

「くそ…」

俺は痛みとパニックで、どうすればいいか分からなかった。しか
しその時、

”ピピピピピ”

俺の携帯電話が鳴った。

「もしもし…」

「アキラか。俺だよ。ナオトだ」

「兄さん！？」

「前に一緒に行ったレストランの近くに、建設中のビルがあったろ
う？そこまでこい」

「なに？」

「お前の大事な人も一緒だ」

「なんだと!？」

「警察に言ったら、この女を殺すぞ」

「女!？」

「アキラ君……」

一瞬、女性の声が聞こえた。

「ま、まさか……」

「じゃあな」

電話は切れた。

「そんな……」

あれはまゆみさんの声だった。なぜ?まゆみさんの店に行ったり、つけられてたのか?

とにかく俺は急いで建設中のビルまで行った。

俺はビルの前に着いた。建設中とはいえ、かなり出来上がっていた。

「はあはあ……」

腕の傷は痛みを増していた。いや、しかしもう感覚が麻痺していた。

「ここか……」

俺はビルをよく見てみた。

「ん?」

一カ所だけ、ガラスの割れている所がある。そこから中に入れそうだった。

「まゆみさん……」

俺は中に入った。

「真っ暗だな……」

俺は慎重に歩を進めた。

「おい!きたぞー!どこだー!」

俺の声が響き渡った。そして、

「よく来たな、わが弟よ」

そういつとナオトは持っていた懐中電灯をつけた。そして懐中電灯の光を大きな鏡に当たるように置き、視界を確保した。

「に、兄さん、はっ！」

「アキラ君……」

「まゆみさん！」

やはりまゆみがいた。まゆみは腕と足を縛られ、地面に横になっていた。

「まゆみさん！」

俺は少し震えていた。

「お前のことは、ちよつといろいろ探らせてもらったよ」

「アキラ君……」

不安げなまゆみ。俺は怒りがこみ上げてきた。

「きさま……」

「落ち着け。まあ聞け。今からお前におもしろい話をしてやる」

ナオトは銃をまゆみに向けた。

「く……」

「勝ち組、負け組みって言葉があるよな？誰が言い出したか知らないが、とにかくある。単純に言って今の社会じゃ金持ちが勝ち組、貧乏人が負け組み、みんなそう思ってるだろ？」

「……」

「だが本当は違う。人間ってのは……違うな……生物ってのは生き残ること、自分の子孫を残すことが出来さえすれば、それでいいのさ。金持ちだろうが貧乏人だろうが、そんなのは関係ない」

「だから……なんなんだ……？」

「さらに深く考えると、生物は自分たちの種族が生き残ればいいってことになる。これがどういうことか分かるか？」

「いや……」

「今の人類は、生まれながらに勝ち組なんだよ。天敵もない。絶滅なんてするはずがない。これだけの数がいればな」

「……」

「だから俺がたどり着いた答えはこうだ。人生は…自分の好きにすればいい。やりたいようにすればいいってね」

「…」

「その結果が…ごらんの有り様だ」

「お前は…狂ってる。何があつたか知らないが…お前は狂ってるよ」

「狂ってる？金のために我が子を差し出す親のほうか、よっぽど狂ってるぜ」

「…」

俺は震えが止まらなかった。

「というわけで…ゲームをしよう」

「ゲーム？」

「ああ。命を懸けた、楽しい楽しいゲームをな…」

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2938m/>

ブラザークエスト その3

2010年10月8日14時30分発行